

青年司書から高齢教授までの遍歴

—意欲と努力に運加わって開く扉—

國 分 信

◆自然の四季，人生の四季

わが国のように地理的条件に恵まれた国では、自然の四季は春、夏、秋、冬と規則正しく訪れている。自然の四季を人生の四季に喩えることはしばしば行なわれている。例えば春は青春期、夏は壮年期、秋は初老期、そして冬は老人期である。自然の四季と人生の四季との決定的な違いは自然の四季は蘇るが人生の四季には蘇りがないということである。夏が過ぎれば秋、秋が過ぎれば冬と循環があるが人生にはそれがない。それだけに人生の四季は大変貴重なものに思えるのである。

青年は未来を語り、老人は過去を語るという。青年時代は錯覚で無限の時間があるように思えたものだ。また老人だから過去だけを話す訳ではない。年と言うものの長さ、月日と言うものの長さ、それらは人に等しく与えられているはずなのにそれぞれの長さの感じは人によって、年代によって異なる。実に不思議と言うほかはない。

わが国の官庁や企業組織などでは年功序列、終身雇用が一般的な慣行であったが、バブル経済の崩壊によって従来の慣行は揺らぎ始めている。しかし、まだまだ根強いものがある。このような環境のもとで、リストラに合うこともなく円満に退職する人々は少なくなっていると思う。しかし筆者は転職者に厳しい環境のもとで、図らずも異例とも言うべき、2度中途採用された経験をもっている。

◆図書館学事始めの頃

わが国の大学レベルでの図書館学は米国人口

パート・ギトラー教授を中心とする米国人チームにより始まった。ギトラー氏をはじめとする米国人訪問教授団はジャパン・ライブラリー・スクールと好んで呼んでいたが、正式には慶応義塾大学文学部図書館学科であり、現在は図書館情報学科と改称している。同学科は昭和26年4月に発足したが、その当時、わが国は未だに連合軍による統治の下にあった。主権を回復するサンフランシスコ条約の締結にはもう少し時間が必要であった時代であった。

最近、米国の有名出版社より、ギトラー教授の著書が出版された。その題名は『ロバート・ギトラーとジャパン・ライブラリー・スクール』。その内容は日本およびジャパン・ライブラリー・スクールについての回顧録であった。英文を読み慣れていない者だが、その当時の時代的な背景や、米国式の授業の方法等についての実際を知っていたので大変興味深く読むことができた。このように熱心に読んだのには理由がある。実は私、昭和28年4月から昭和30年3月までの2年間ジャパン・ライブラリー・スクールに学士入学をしてギトラー教授をはじめとする米国教授団の授業を実際に経験し、文字通り、聲咳に接したことがあるからである。

なお、卒業後の就職先として上野学園短期大学の図書館を推薦して頂いた。仕事は短期大学図書館を大学図書館に改組、充実するというものであった。

◆大学院生・高校非常勤講師からの刺激

上野学園は中学から短大までの比較的規模の小

さい学園であった。上野学園に初出勤したとき、紹介されたのが同学園付属高校の非常勤講師で東大の大学院で学んでいるというふたりの若い方であった。ひとは哲学専攻、もうひとは農村社会学専攻であった。率直に言って、それらの専攻で、大学社会でしかるべきポストを得ることは難しいであろうと感じた。同じ世代でまだ独身生活をエンジョイしている者ばかりだったので、よく一緒にスポーツやゲームなどで遊んだものである。彼らから折に触れて知的な刺激を受けたので大学院に進学したいという気持ちが徐々に強くなってきた。そしてそのことを上司に相談するところまで発展した。そして受験してもよいという感触を得て、秋の大学院入学試験を受験した。幸いにも合格することができたが、さらに一層幸いなことには、大学院修士課程の在学中は身分を派遣扱いにするという学園上層部の配慮があった。このような計らいもあって、大学院生活も比較的順調に始まった。

◆異例の中途採用

わが国企業経営の特徴は依然として年功序列、終身雇用であって、中途採用を歓迎する企業は少ないようである。したがって、中途採用はよほどのことがない限り実施されない。滅多にないという中途採用を図らずも2度も経験することになった。まず最初は農政学者東畑精一博士からのお話である。その時、東畑精一博士は東大名誉教授で、金融経済研究所およびアジア経済研究所の初代所長をしておられた。アジア経済研究所は発足当初で人材集めが大変だったそうである。なぜ私の名前が2カ所にリストされていたのか詳らかでないが、結局、筆記試験、面接を経て、金融経済研究所に研究員兼司書として採用していただくことになった。昭和34年(1959)9月のことであった。

金融経済研究所での仕事は主にわが国主要企業の社史の収集と社史目録の編集であった。約2年の歳月を費やして『本邦会社史目録』を編集し、非売品ながら小冊子を完成させた。同書の巻頭に東畑精一博士に序文を頂いた。同博士の序文は、

一字一句や句読点を疎かにしない格調の高い名文で感銘を受けた。『本邦会社史目録』は多くの反響を呼び、また新聞・雑誌の書評や紹介で高い評価を得ることができた。未だ、同目録が編集の段階にあるときから、日本開発銀行への中途採用の手続きは、後に当事者のひとりとなる私の知らないところで着々と布石されていたのであった。

日本開発銀行(注:現在は日本政策投資銀行)の当時の副総裁は平田敬一郎氏であった。同氏は大蔵事務次官を経て日本開発銀行の副総裁となり、後、総裁となった方である。同氏は金融機関における情報の蓄積、検索、利用に理解のある方であった。当時「開銀は情報の宝庫である。これらの情報を有効に活用しなければならない」と銀行内で強力に主張されていた。当時の総務部事務改善課長は副総裁の意を体して、情報センター関連の業務に専念していた。金融経済研究所から刊行した『本邦会社史目録』は幸いに好意的な反響が続いた。そして社史のことについて話しを聴きたいと申し出て来られた方が200人を超えた。その中に日本開発銀行の課長クラスの職員も含まれていた。社史の目録が私を転職させるきっかけとなった訳である。後日聞いた話であるが、日本開発銀行はその発足以来初めて中途採用を実施したとのことであった。

初出勤は昭和37年(1962)8月1日。日本開発銀行が中途採用を急いだ理由が分かるような日付である。ルーティン・ワーク、引越しの準備、引越し作業の監督、引越しの後始末などの仕事を急ぐという超多忙の時、雑誌情報の検索手段としての雑誌記事索引の再検討を行なった。新設された中央資料室のPRの一助としての年度版として最初の企画・編集を行ったのである。昭和39年度版が最初のものであった。

この年度版の序文には著名エコノミストの下村治博士から序文を頂いた。当時日本開発銀行の理事で中央資料室を管掌しておられた。この本が刊行されるや否や、多くの反響を得ることができた。大袈裟な言い方となるが、この本は洛陽の紙価を高めたのではないかと思っている。

日本開発銀行の後にも研究所、短期大学、大学で働く機会があったが、これらは転職ではあるが、中途採用ではないので省略することとしたい。

◆携わった編集、執筆をした出版物

携わった編集物には先に述べた『本邦会社史目録』、『産業経済雑誌主要記事索引』がある。その他の編集物として『産業情報総覧』、専門図書館のスタッフ・マニュアル、スタッフ・マニュアルの作成と活用、統計要覧などがある。これらは勤務先の性格から見て、自ら企画したものや、すでに出版物となっているものを年度別に再編集したものである。資料の速報性の必要性から、銀行内部署の情報ニーズから旬刊、月刊、季刊、年間とよきめの細かい発行頻度で発行されるものもある。

私の論文等は多数あるが、業務として執筆したものは比較的少ない。自己啓発を目標として執筆したものうち、単行本の丸善刊『研究情報と図書館』を特筆しておきたい。第6刷りとなって、すでに絶版である。

専門図書館のスタッフ・マニュアルでは、大手町資料室連絡会が編集、実費で頒布した。それには編集長として関わった。

『産業情報総覧』は外部の学識経験者執筆者60名を動員した本格的な書誌索引であり、産業経済雑誌、雑誌主要記事索引累積版も兼ねている。

『図書館年鑑』には昭和56年の創刊号から昭和63年度版で編集委員として関わった。

◆国際交流

英国の外務省関連団体にブリティッシュ・カウンシルまたは英国文化振興会と呼ばれる機関がある。この振興会が日本の図書館員に英国の図書館見学の機会を与えるという企画が発表された。当時は厳しい外貨事情などがあって、日本からヨーロッパは非常に遠い存在であった。当時の賃金水準から観て外国へ出掛けて図書館事情を見学するなんて夢のまた夢のような話であった。小田実の『何でも見てやろう』がベストセラーになっていたころの話である。私の胸は騒いだ。内々に上

司と相談し、応募者のひとりとなった。叩けよさば開かれんの言葉を思い出しながら……

幸運にもこれに合格し、泥縄的だが英会話の学校に夕方通い始めた。会話の進歩は遅かった。しかしひとり歩きする度胸だけはかなり発達したようである。昭和41年（1966）3月から10月までの6カ月間のイギリス留学が実現した。

英国へ留学してからちょうど10年たった昭和51年（1976）、韓国ソウルで開催された国際図書館連盟のセミナーに参加し、多くの韓国人と知り合いとなった。その中のひとりが韓国釜山の慶星大学校の名誉教授林泰三氏、およびもうひとりが林教授から紹介された朴正吉氏であった。両氏は日本留学の意欲が大きかったのでその実現に協力した。幸いに東大での林泰三氏と慶応義塾大学での朴正吉氏の在外研究が実現した。

米国にSLA（Special Library Association）という専門図書館関係の団体がある。日本にある専門図書館協議会はこのSLAと親しい関係を維持している。米国と日本の中間にあるハワイで日米共催で会議を持つという提案が採択され、早速発表者の募集があった。昭和51年頃の話である。かねてから温めていた“The Outline of Business Information in Japan”のテーマで発表を希望したところ幸いにも採択された。100頁の付属資料まで用意するという極めて大がかりな発表であった。出張の許可をすでに得ていたこともあり、他の室員の協力も得て、発表本文および付属資料を作成した。資料はやっと間に合い、日本からの参加者の協力によってハワイの会場まで運んでもらうという、際どいタイミングで間に合った。

資料を配布し、資料に基づいて発表すると、参加者からの反響は大きく、資料寄贈依頼が帰国後も数か月続いた。資料を数回増刷するなど反響への対応に追われた。

国際交流の最後として日本、韓国、台湾による共同発表事例を紹介したい。当時在日の訪問講師としてわが国で研究中であった朴正吉氏（韓国）、林孟氏（台湾）、そして國分信（日本）の3名で日本図書館学会第33回研究大会（於 相山女学

園大学)において次のテーマで共同発表を行なった。

「東アジア3国における図書館・情報学教育の現状と展望 —比較図書館学的接近による国際比較—」。

◆図書館・情報学関係学協会での役職

学協会への関わりにはいろいろのものがある。学協会と積極的な関わりを持つ場合もあれば、会誌の購読者として止まるという関わりもある。

図書館活動の実践的部門で長いこと働いてきたこともあり、正直なところ学協会との関わりは比較的少ない。それでも、理事、評議員、委員、委員長など、いくつかの役職を経験させてもらった。

下記のように図書館関係学協会には種々のものがある。

学協会の規模

国際的なもの

全国レベルのもの

地方レベルのもの

私が会員となっている学協会

三田図書館情報学会

日本図書館情報学会

専門図書館協議会

日本図書館協会

情報科学技術協会

西日本図書館学会

記録管理学会

◆学会での研究発表

図書館・情報学だけに限らないが、学協会の会員になったら研究を行い、その成果を研究大会等で発表する事ができる。発表することは会員としての権利であり義務でもある。研究大会は学協会が会員に対して研究発表の場を保障するきわめて大事な催しである。

今までに学協会で発表したものは少なくないが、研究成果の多様性を見て頂くために最小限の書誌的事項のみを紹介することとする。

学術情報システムと大学図書館

資料探索とデータベース

図書館学教材における専門図書館

図書館の制度的位置について

資料室を中心とする学際的事例

図書館の経営指標についての一考察

わが国4館種における図書館利用案内と図書館スタッフマニュアル

—最近の3つの全国調査を踏まえて—

東アジア3国における図書館・情報学教育の現状と展望

—比較図書館学的接近による国際比較—

わが国諸大学における「情報」教育(I)

—大学「情報」関係学部、学科の名称の整理と分析

わが国諸大学における「情報」教育(II)

—短大・高専「情報」関係学科の名称の整理と分析—

上記のリストは昭和55年10月以降平成8年10月迄の26年間に研究発表したものである。

本誌掲載の研究著作目録は〔著書〕〔論文・研究ノート〕〔書評〕の3項目より成り、学会発表という項目がない。学会で発表した論文は予稿集という形で発表の要旨が纏められているのであるから、研究著作目録に掲載してもよいと思うが、現在のところ掲載は前記3項目に限られているようである。

そこで研究テーマの特殊性を見ていただくために、〔学会での研究発表〕という項目で幾つかの事例を挙げることにしたわけである。

◆縁無きところに縁生じ

他の大学では事務局あるいは事務部などと呼んでいるが、慶応義塾大学ではそういう部署を塾監局と呼んでいる。三田に図書館学科ができるらしいと聞いたのは、私が下宿をしていた家の次男で、塾監局に勤めていたI氏であった。下宿で同じ屋根の下で暮らしていたので毎日のように図書館学科のことは話題となっていたと思う。しかし何しろ、半世紀以上も前のことであるから、今思い出そうとしても話したこと、心配をしたこと等、

すっかり忘れてしまっている。

ゴルフなどで、「れば」、「たら」と言うことは禁句とされているから言うてはいけないと思うが、ついつい言うてしまうのが凡人の常である。その当時 I 氏との接点がなかったら、当然、私の人生コースは書き改めなければならないであろう。

今までは人生における縁などあまり意識せずに暮らし、生きてきたが、知らぬ間に自分を取り巻いている人々との縁のことを、もう少し深く考える必要があるのではないかと考えるようになった。

たいして能力がある訳でもなく、バックアップしてくれる名門の親戚がある訳でもないのに、大学院生身分への配慮、短期間だけれど外国を見るチャンスを与えられたこと、比較的有利な条件で中途採用されたこと、著名な学者に出会えたこと、国際的な交流が可能であったことなど、感謝しつつ思い出している。これらはすべて縁なきところ

から生じたものである。縁と言うものは予想を超えたパワフルな力で人々の生活に影響を与えている。

図書館学科に入学し、図書館学を学んだことにより私の人生の方向等がほぼ決まったかに見えたが、それは私にとって決定的なものではなかった。自らの意志と努力に運が加わって多くのものが変えられたのである。すなわち縁無きところに縁が生じるのである。本稿においては、元日本開発銀行総裁故平田敬一郎氏、農政学者故東畑精一博士、エコノミスト故下村治博士などの著名で錚々たる方々との縁を紹介させて頂いたが、塾監局の青年の例で分かるように、身分、年齢、学歴、財産などに関係なく他者に影響を与え、そして他者から影響を与えられている。

縁無きところと置いていても縁が生じて、強い絆で結ばれるかもしれないのである。